

第7章 小牧実繁の歴史地理学

—その理論と実践的研究—

I. はじめに

小牧実繁（第14図）は、近現代日本における歴史地理学発達史を考える上で極めて重要な存在である。小牧は大正8（1919）年に京都帝国大学（現、京都大学）文学部に入学して地理学者の小川琢治や考古学者の浜田耕作に学び、卒業後は同大学で先史地理学を講じた。昭和8（1933）年には、「時の断面」説を軸とする体系的な歴史地理学方法論を提唱したが、その方法論はわが国の歴史地理学の基本的思考ともなった¹⁾。昭和12（1937）年に『先史地理学研究』²⁾で博士学位を取得したが、これは大学の地理学教室で学んだ研究者としては初めての学位取得であった³⁾。小牧は翌13年ごろから「日本地政学」に大きく傾斜したこともあり、歴史地理学研究に注力していた期間は15、6年程度に過ぎないが、小牧の登場により歴史地理学の潮流が変化したことは間違いない。

このように日本の歴史地理学の発達に大きな役割を果たした小牧であるが、従来、その歴史地理学に関するまとまった研究は非常に少ない状況にあった。唯一の例外が足利健亮の論考「小牧実繁と歴史地理学」⁴⁾であるが、小牧の学史上の重要性を考える時、この先行研究の少なさは意外な感すらある⁵⁾。近年、柴田陽一によって小牧の自筆著作目録が紹介され⁶⁾、さらに小牧が傾倒した「日本地政学」に関する詳細な研究がなされるようになったが⁷⁾、歴史地理学に関する研究蓄積はいまだに薄いのが現状である。

そこで本章では、従来の学史研究の空白ともいえる部分を補うべく、小牧実繁の歴史地理学に関する研究を試みる。研究にあたっては、まずは唯一の専論である足利の研究を検討の手がかりとすることとしたい。足利は、小牧が先史地理学に手を染めるに至った経緯に「小牧其の人への聞き書きを交えて」詳細に言及するとともに、昭和8年刊行の『歴史地理学』（岩波講座・地理学）を境とし



員会編
口絵より

て理論上の「大きな転換」があったと指摘している⁸⁾。この「転換」の事実は本章でも重要なテーマとなるが、足利は小牧の理論的転換について概括的な問題提起はしたものの、具体的な内容については十分論じてはいない。また、理論の転換が小牧の実際の研究にどのような変化をもたらしたかについても検討しておらず、残された課題も少なくない。

本章では、有力な先行研究である足利の論考を踏まえつつ、小牧の理論やそれと実践的研究との関係について再検討することで、小牧の歴史地理学や先史地理学の全体像解明に迫ることとしたい⁹⁾。なお、本章では検討対象を昭和 20 (1945) 年の太平洋戦争の終結までとし、戦後の小牧の研究活動については対象外としている。というのも戦後の小牧の関心は歴史地理学から主に民俗地理や村落地理に移行しており¹⁰⁾、小牧自身も昭和 38 年に「かつて先史地理学、歴史地理学の研究に身をゆだねたころを思い、当時に比してこの方面の研究が格段の進境を呈するにいたった盛況を見て感無量」¹¹⁾と述べているように、戦後はほとんど歴史地理学的な研究を行っていないことによる¹²⁾。そこでここでは、主として大正期から太平洋戦争終結までの小牧の歴史地理学について地理学史的な考察を試みることにしたい(第 11 表)。

II. 先史地理学研究の開始

小牧は明治 31 (1898) 年、滋賀県滋賀郡下坂本村(現、大津市下坂本)に生まれた¹³⁾。少年時代から歴史に興味を有していたようで、膳所中学校在学中には琵琶湖岸の坂本で行われた喜田貞吉の講演会にも参加している¹⁴⁾。大正 5 (1916) 年 3 月に膳所中学校を卒業し、同年 9 月に京都の第三高等学校(現、京都大学総合人間学部)第一部乙類に入学した¹⁵⁾。ここで小牧はほかの書物は読まず、主に黒板勝美の『国史の研究』を熟読したという¹⁶⁾。黒板のこの書は当時の国史研究の入門書として好評を博したもので、なかには補助科学としての歴史地理学に関する記述もあり¹⁷⁾、若き日の小牧はここで歴史地理学への知見を深めた可能性もある。大正 8 年 7 月に第三高等学校を卒業し、同年 9 月、京都帝国大学文学部史学科の地理学教室(正式には史学地理学第二講座)に入学した¹⁸⁾。地理学を選択した要因の一つに、当時の地理学教室教授の小川琢治からの熱心な勧誘があったという¹⁹⁾。

小牧が入学した当時の地理学教室には、小牧を勧誘した教授の小川と助教授の石橋五郎がいた。特に教授の小川は、小牧を講義や実習で厳しく鍛えるとともに、調査旅行に同行させてフィールドワークの手ほどきをした²⁰⁾。大正 10 年には湖沼学の権威であった田中阿歌麿に対して小牧の調査同行を依頼している²¹⁾。小牧が自然地理学に深い造詣を有するのも、小川の教育の賜物であるといえよう。卒業論文では石川県の河北潟をフィールドに選定して海岸砂丘の地理学的な調査を行ったが、足利によれば、小牧は調査に従事する過程で、その海岸砂丘から石器が出土したとの報告に接し、これを契機に先史地理学への傾斜を深めていったと

第11表 小牧実繁の歴史地理学関連著作目録(昭和20年まで)

- 大正11(1922).07&08 砂丘移動の人文上に及ぼす影響. 歴史と地理10(1):29-35, 10(2):117-123
 12(1923).09&10&11 十六島湾沿岸の土地と住民. 歴史と地理12(3):294-299, 12(4):352-359,
 12(5):476-480
 14(1925).01 最近に於ける北陸海岸線の移動. 地球3(1):159-168
 14(1925).01 出雲の沖積地海岸. 地球3(1):227-234
 14(1925).09 古代四国の集落に就いて. 地球4(3):208-216
 14(1925).10 古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて. 地理教育3(1):11-20
 14(1925).11 歴史地理学に関する私見. 歴史と地理16(5):418-427
 昭和01(1926).04 先史集落地理. 地球5(4):298-318
 01(1926).01&04 日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察. 史林11(1):81-97, 11(2):234-242
 01(1926).10-11 ヴァロー氏の歴史地理学論. 歴史と地理18(4):291-300, 18(5):419-429
 02(1927).01 河内平野の古地理. 史林12(1):46-56
 02(1927).10&11&12-03(1928).01&02 宍道湖の鹹度問題. 地球8(4):257-270, 8(5):361-368,
 8(6):418-426頁, 9(1):46-52, 9(2):123-127
 05(1930).05 先史地理学に就いて. 地理教育12(2):105-115
 06(1931).03 先史地理研究に就いての二三の考へ. 歴史と地理27(3):408-417
 08(1933).06 先史地理. 地理学年報1:75-95
 08(1933).09 歴史地理学(岩波講座・地理学). 岩波書店
 09(1934).04&07&12 本邦海岸砂丘固定作業史の断片. 地理論叢3:113-208, 4:127-152, 5:1-9
 09(1934).04&11 本邦潟湖埋積埋立干拓史の断片. 地理論叢6, 67-95, 7:121-132
 10(1935).06&07&08 琵琶湖湖上交通の変遷. 地理教育22(3):241-246, 22(4):405-410,
 22(5):755-761
 10(1935).08 西近江路交通の歴史地理学的考察. 地理教育22(5):569-589
 11(1936).02 江勢交通路と近江商人. 地理と経済1:45-59 村松 寛と共著
 11(1936).05 江北の断層地形と交通路. 立命館文学3(5):508-519 村松 寛と共著
 11(1936).08 気山津の変遷. 地理論叢8:155-177
 12(1937).01 先史地理学研究. 内外印刷出版
 15(1940).01.01&02 上代日本国土の地形. 読売新聞
 15(1940).09 先史時代の地理的環境(人類学・先史学講座17). 1-49 藤岡謙二郎と共著
 20(1945).05 平安京変遷の地理学的考察. 史林30(1):1-10

注1)ゴシック体は単行本を指す。

注2)歴史地理学が主たるテーマでない場合でも、歴史地理学的な記述を一定以上含む論考については掲載した。

注3)昭和13年以降において「日本地政学」の性格が濃厚な歴史地理学的研究については割愛した。

資料:「小牧実繁先生著作目録」(小牧実繁先生古希記念事業委員会『人文地理学の諸問題』大明堂, 1968),
 519-522頁, 柴田陽一「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」歴史地理学47-2, 2005, 47-53頁など。

いう²²⁾。

大正11(1922)年3月に卒業論文「日本海に於ける海岸進化の一型式」を提出して史学科を卒業し、大学院に進学した²³⁾。大学院入学以降、引き続き小川や石橋の指導を受けるとともに、考古学教室の浜田耕作(青陵)の指導も受けるようになる。浜田はわが国の近代考古学の先駆者として知られるが²⁴⁾、小牧はこの浜田に深く傾倒し、「私の専攻所属は地理だか、考古学だか判らなくなるくらゐに毎日先生の御室に出入り」していたという²⁵⁾。浜田は地理学の視点から考古学研究を進めることを期待し、貝塚発掘調査などに同行して指導した²⁶⁾。大正15年

4月からは京都帝国大学文学部講師として「旧石器時代の人類と其住地」の講義を担当するようになったが²⁷⁾、これは考古学の学生も聞ける講義をしてほしいとの小川と浜田からの依頼内容を受け、旧石器時代の地理をテーマにしたという²⁸⁾。

ところで小牧はこの頃、歴史地理学理論に関わる重要な論考を発表している。それが「歴史地理学に関する私見」である。次節においては、本論考を通じて初期の小牧の歴史地理学理論を明らかにするとともに、それと実際の事例研究との関係を考察していきたい。

Ⅲ. 初期の歴史地理学理論と実践的研究

(1) 歴史地理学理論について

小牧は大正14(1925)年、雑誌『歴史と地理』誌に「歴史地理学に関する私見」と題する論考を発表した²⁹⁾。この論考の冒頭で小牧は、「歴史地理学とは如何なる学問であるか」について、坪井九馬三が『歴史地理学』において、歴史地理学は歴史事実を地理の着眼点から説明しようとするものとし、黒板勝美も『国史の研究』で「いはば歴史と地理の間の子の様なもので地理の歴史的研究即ち現在に於ける地理の歴史の変遷を明かにするもの」と述べるにとどまり、まだ十分に理論的に位置づけられていなかったと指摘している。さらに「西欧の諸権威に参照したが其の云ふ所必ずしも全部之に従ふべきでもなかった」と述べ、「種々思索の結果略下の如き私見を立て広く大方諸賢の是正を仰がんと決心した」と執筆動機を述べている。

続いて小牧は、歴史地理学を3つの方面に分類している。まず1つ目は、自然環境の変遷史である。すなわち「地表の地理的条件が人類歴史の黎明以後自然的に如何に変化したか」に関する研究である。2つ目は人類による地理的環境への作用である。小牧によれば「人類の生活活動行為が歴史時代に入りて以後其の環境をなす地理的条件に如何に作用し如何に之を変化せしめたか」についての研究である。3つ目は2つ目とは逆に、地理的環境の人類歴史への影響であり、「大きく云へば人類の歴史が其の地理的条件によって如何に影響せられたか」の研究であった。小牧はこの3方面の研究について、1つ目を自然地理学に、2つ目と3つ目を人文地理学に含め、この3方面の「総合的統一的研究が歴史地理学の使命」とした。

このうち、1つ目の自然環境の変遷史の研究については、地質学や自然地理学に造詣が深かった小川琢治の影響が濃厚である。小牧の先史地理学が先史自然地理学ともいふべき内容なのは、小川の学風の影響であると考えられる³⁰⁾。2つ目、3つ目の分野は、まさしく地人相関論の研究であり、足利の指摘した「関係科学としての地理学」の立場である³¹⁾。小牧は「人類の生活活動^{マツ}が凡て地理的条件の考察のみによって説明し尽くせるものではない」と単純な環境決定論を戒めてはいるものの、「地人相関」³²⁾や「人類自然の相関」³³⁾を重視する立場は、まさしくもう一人の指導教官であった石橋五郎の地理学観そのものに他ならない³⁴⁾。

興味深いことに小牧はこの地人相関的な研究のうち、特に3つ目の方面の研究、すなわち地理的環境の人類歴史への影響に関する研究を重要視していた。人類の主体性より自然環境の影響力に重きを置いたのは、先史地理学者としての小牧の特徴である。すなわち先史時代においては、人類の「活動が地理的条件に変化を与へた程度は極めて微々たるものであつたらうと思はれるのに反し、之に支配せられ順応を余儀なくせられた事は想像に難くない」³⁵⁾ という発想であった。文明の発達した歴史時代はともかく、先史時代においては人類の地表改変力は微々たるもので自然環境の影響力のほうが重要と考えていたのである。しかし小牧は、この考え方を歴史時代においても適用しており、後述するように、歴史の地理的解釈ともいうべき研究を進めている。

以上のように小牧は、地理学教室の小川や石橋の影響下において歴史地理学理論を形成していった。特に地人相関論は、初期の小牧の理論の特徴であったといっても過言ではない。小牧はこのような理論を、大正15(1926)年の「先史集落地理」³⁶⁾ や昭和5(1930)年の「先史地理学に就いて」³⁷⁾ でも主張している。

(2) 実践的研究の内容について

それでは小牧は、以上のような歴史地理学理論のもと、どのような実践的研究を行っていたのであろうか。まず1つ目の自然環境の変遷史については、大正14(1925)年の「最近に於ける北陸海岸線の移動」³⁸⁾、同15年の「日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察」³⁹⁾、昭和2(1927)年の「河内平野の古地理」⁴⁰⁾、同2年から翌年にかけての「宍道湖の鹹度問題」⁴¹⁾などが含まれる。地人相関論の研究については、この時期には2つ目のタイプは見られず、3つ目のタイプの研究のみが見られる。例えば、処女論文である大正11年の「砂丘移動の人文上に及ぼす影響」⁴²⁾をはじめ同14年の「出雲の沖積地海岸」⁴³⁾や「古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて」⁴⁴⁾、「古代四国の集落に就いて」⁴⁵⁾が、地理的条件が人類歴史に与えた影響を考察している事例としてあげられる。

まずは1つ目の自然環境の変遷史に関する研究について検討したい。上に掲げた諸論考のうち、昭和2年発表の「河内平野の古地理」が比較的コンパクトにまとまった優れたモノグラフィであることから、以下でその内容を簡単に触れることとしたい⁴⁶⁾。小牧はこの論考において、先史時代には大阪平野の広範囲にわたって「一大湖沼」が存在したと考えた。すなわち江戸時代の絵図や紀行、名所記などから判断して元禄以前にはこの附近に「深野池」と呼ばれる池沼があったこと、さらに深野池以前にもこの地に『古事記』に見える「久佐迦延」、『万葉集』に登場する「草香江」という広大な江であったことから、遡って先史時代に「一大池沼」が存在しても不思議ではないと推測した。また、この附近は古淀川と古大和川の合流する地形的条件にあり、池沼が存在したことは地形的にも明白であると考察した。また、考古学的な証拠としては、現在の東大阪市内にある日下貝塚から発掘された蜆貝殻を取り上げ、この蜆貝殻が「其の形態甚だ大なるもの」で、このような大きな蜆が生育するためには巨椋池のような巨大な池沼で存在しないと困難であると指摘した。さらにこの「一大湖沼」は、京都南部の巨椋

池と連続し、結果として大きな湖水を形成していたのではないかと推測した。というのも、日下貝塚出土の蜆は琵琶湖、巨椋池、淀・木津両河川以外には生息しない大型種のものであることから、先史時代のある時期、琵琶湖や巨椋池、淀・木津両河川とこの附近の湖沼は連続した水面であり、この水面による連絡によって琵琶湖や巨椋池に特有の蜆貝が旧深野池まで移動してきて繁殖したと考えたのである。小牧は論文の最後に、この日下貝塚を残した「種族」を知ることで先史時代におけるこの地域の開拓状況を解明することが出来るとして「切に今後における人骨の発見を祈り又考古学者人類学者歴史家の共同研究を冀望する所である」と述べている。

以上が「河内平野の古地理」の内容であるが、まさしく地理学教室の小川と考古学教室の浜田の門下の研究らしく、地形と貝塚に基づいて古環境を復原する先史自然地理学の研究ということができよう。主に石器時代に焦点をあてつつも、江戸時代の深野池や古代の湖沼の変遷を検討した、すぐれた研究事例といえる。

続いて3つ目の研究方面である、地理的環境の人類歴史への影響に関する研究について検討したい。ここでは小牧の研究の中では異色の事例である「古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて」を取り上げたい⁴⁷⁾。この論文で小牧は、『日本書紀』にある天孫民族と猿田彦族との関係について注目し、九州にいた猿田彦族が天孫民族の渡来を受けて九州南方に向かい、さらに伊勢方面に渡ったという伝説について地理学的な解釈を加えた。小牧は日本列島の南岸沖を東北進する黒潮に着目し、猿田彦族は「九州南部より船を操り太平洋の海流を利用し海路或は海岸伝ひに伊勢方面に植民したものであらう」と推論した。小牧は太平洋沿岸の黒潮の流路と流速について検討し、流路は九州伊勢間の航海に好都合であること、その速度は毎時約10キロメートルで航海速度も速いことから、「此の考は全くの空想でない」という結論に達した。さらに小牧は考察を進めて、古代における東北開拓は「海流の方向と一致」していたと推測している。

小牧によるこの研究は、まさしく歴史の地理的解釈の研究であり、歴史の補助学としての歴史地理学に近い内容となっている。小牧自身、「歴史上の事実をすべて地理的事情から解釈しようとするのは勿論誤であるけれども、地理的事情をも参酌する事は必要であり興味ある事でもある」と考えたという。もともと小牧は第三高等学校時代に黒板勝美の『国史の研究』を愛読しており、雑誌『歴史地理』にも目を通していたようであるから⁴⁸⁾、歴史家の視点をよく理解していた可能性が高い。

以上、小牧における初期の歴史地理学理論とその実践的研究について検討した。初期の小牧は、自然的基礎に関する研究、および地人相関論的な研究が歴史地理学の中心的テーマであった。しかしすでに述べたように、小牧は昭和8年刊行の岩波講座『歴史地理学』においてこのような初期の理論を否定し、新しく「時の断面」説を主張するようになる。次節においては、この理論的な変化について詳細に検討することとしたい。

IV. 「時の断面」説と実践的研究

(1) 「時の断面」説の提唱

まずは昭和8(1933)年の『歴史地理学』(岩波講座・地理学)⁴⁹⁾刊行に至るまでの小牧の動向について簡単に触れておきたい。昭和2(1927)年、当時文学部講師の任にあった小牧はイギリス、フランスなどへの海外留学を経験した。特に先史学が進んでいるフランスに重点的に滞在し、旧石器遺跡・遺物の見聞と調査も経験している⁵⁰⁾。翌3年にはロンドンなどで行われた万国地理学会会議に参加し、歴史地理部会で先史地理学について発表して賛同者を得たという。昭和4年に帰国し、同6年3月には地理学教室の助教授に就任した⁵¹⁾。

そしてその1年半後の昭和8年9月、冒頭に述べた『歴史地理学』を発表している。小牧はこの『歴史地理学』の緒論で、過去の自身の歴史地理学観について「今日より之を顧みれば、多くの点に於いて改訂を加ふべき必要を痛感するのであつて、今日に於いては、筆者の考へにも大なる変化が起つてゐるのである」⁵²⁾と述べている。足利が指摘するように、ここで小牧は、過去の自らの考えをほとんど否定し、新たな主張を試みようとしているのである。小牧にどのような理論上の転換が起こったのであろうか。以下において、その転換について詳細に検討することとしたい。

この『歴史地理学』における小牧の主張のポイントは、地人相関論の否定と「時の断面」説の提唱という2点に集約される。まず地人相関論について、小牧は「地人相関の研究を以て地理学の使命、職能と考へ、地人相関の理法を発見することそれ自身に地理学の目的を置くことは許さるべくもない」⁵³⁾と述べ、さらに次のように断言した。

所謂地理的環境が人類歴史の過程に与へた影響、人間文化の発展につれ人間が地理的環境に加えた作用の研究、人間歴史の舞台、環境としての土地の研究、換言すれば地と人、歴史と地理との相関関係を以て歴史地理学の目的なるかに考へた学者が、従来は多数に存在し、又現在も尚ほ尠からず存在するかも知れないが、この考へは改められなければならない。(以下略)⁵⁴⁾

足利が指摘するように、この言明はすでに述べた「歴史地理学に関する私見」で披瀝された理論のほとんど完全な否定に他ならない⁵⁵⁾。より厳密にいうならば、特に2つ目と3つ目の方面の研究である地人相関論の否定である。穿った見方をすれば、指導教官であった石橋五郎の自説であった地人相関論の否定とも受け取れる言明ともいえるが、地人相関論を否定した真の小牧の狙いは、石橋地理学の克服というよりも、地人相関論における「地理的環境が人類歴史の過程に与へた影響」に関する研究、すなわち3つ目の研究である歴史の地理的解釈を排除することにあつた。小牧はこの歴史の地理的解釈について次のように批判している。

「歴史の地理」(歴史の地理的解釈—筆者注)は多くの場合に歴史地理学と混同せられ、かかる研究が歴史地理学の使命であるとさへ考へられ、我国に

於いても、地理学者、殊に京都学派の地理学徒の、かかる研究を以て歴史地理学の使命なるかの如く考へ、かかる研究の方向に向ひかけたものもあるが（小牧実繁、歴史地理学に関する私見、の如きかかる考への傾向を示したものである）、かかる研究を歴史地理学の使命また目的と考へることは出来ない。⁵⁶⁾

その上で小牧は、この歴史の地理的解釈の研究を地理学者ではなく「歴史家」や「歴史哲学者」の任務であるとしている。

歴史の過程に対する地理的環境の影響を考察すること、即ち歴史事象の地理的解釈は、地理的史観なる一種の歴史哲学の研究に属するのであるから、これが研究は寧ろ歴史家または歴史哲学者の任務ではなからうか。⁵⁷⁾

このように小牧は、歴史の地理的解釈を含む地人相関論を地理学の任務ではないとした上で、地理学の目的を「自然現象も人文現象も（略）土地・地域に即して、土地地域（景観）を構成するものとして、統一的全体に於いて見る」⁵⁸⁾ ことに見出した。言葉を換えれば、自然現象と人文現象を地人相関的、二元論的にとらえるのではなく、自然と人文が渾然一体として調和した「地的渾一」⁵⁹⁾ を研究対象とする地誌的な科学と位置付けたのである。歴史の地理的解釈が歴史学の補助科学として歴史学に従属するのに対し、土地地域を統一的全体として理解する地誌的な視点は「独立の科学としての地理学」⁶⁰⁾ を保証する理論的根拠となる⁶¹⁾。

以上のような考え方を前提として、小牧の歴史地理学理論の中核をなす「時の断面」説が提唱されるのである。次に掲げるのは、あまりに著名な「時の断面」説に関する言明である。

歴史時代に於ける或る時の断面に於ける土地地域（景観，Landschaft, landscape, paysage の訳語としての景観）を復原し再現して、地理（Geographia）の原語も示す如く、過去に於ける土地を描出すのが歴史地理学の使命、職能である。⁶²⁾

「時の断面」とはドイツの歴史地理学者ハッシンガーの「verschiedene zeitliche Querschnitte」という表現が取り入れられたものであるという⁶³⁾。この「時の断面」の復原・描出とは、換言すれば「過去の地誌」学である。地理学が「主として現在に於ける土地地域」を対象とするのに対し、歴史地理学は過去の「時の断面」における「土地地域の自然的景観，文化景観の統一的全体」⁶⁴⁾ を対象とするのであり、（現在）地理学と連続性を有している。その意味で歴史地理学の対象は、「歴史的現在」である⁶⁵⁾。これは歴史地理学を、歴史学ではなく地理学の一分野とする明確な主張であった⁶⁶⁾。

同時に小牧は、「時の断面」の描出を「歴史的発展的になすこと」も想定していた⁶⁷⁾。歴史地理学の理想を「無限に数多き時の断面に於ける地理断面の描出」

にあるとし、このような歴史地理学を広義の歴史地理学にとらえて「地域史、景観発達史、地理史の科学と漸く合一」するとした⁶⁸⁾。狭義の歴史地理学が「土地地域（景観）（略）の謂はば静止的なるものを、歴史時代の或る時の断面に於いて描かんとする方法」であるとすれば、このような広義の歴史地理学は「土地地域（景観）の歴史時代を通じての動的、流転的なる変化発達を跡づけ究明する方法」ととらえたのである⁶⁹⁾。さらに小牧は、この歴史地理学には「古地理学、先史地理学及び狭義の歴史地理学」が含まれると述べ、地理的科学与歴史的科学の「橋渡し」をする分野であると位置づけた⁷⁰⁾。

(2) 松井武敏の地理学観

小牧が歴史地理学の理論的支柱を、地人相関論から「時の断面」説（過去の地誌学）に移した背景には、足利が指摘するように、京都帝国大学での受講生で、のち経済地理学者として大成した松井武敏の影響があった。小牧自身、岩波講座の『歴史地理学』で「本講は（略）内外諸学者の考説に拠る所が大であるが、殊に松井学士の業績に負ふ所が甚だ大であることを銘記して深い感謝の意を表明して置かなければならない」として、率直に松井の影響を語っている⁷¹⁾。足利は松井の影響について具体的に言及していないが、小牧の理論的転換を知る上で重要であると考えられることから、ここでは松井の地理学観に触れることとしたい。

松井武敏は明治43（1910）年に和歌山市に生まれ、昭和5（1930）年に京都帝国大学文学部史学科に入学した⁷²⁾。ここで小牧らの教えを受け、昭和8年に卒業論文「生産現象を中心としたる紀北の経済地理的構成の一考察」を提出して同大学院に進学した⁷³⁾。この卒業論文は地理学教室の機関誌『地理論叢』に序論・本論と2回に分けて掲載されたが、このうち重要なのが、小牧が大きな影響を受けた序論「経済地理序説」である⁷⁴⁾。この論考の主眼は、科学としての地理学の独立性や固有性に関する主張にあった。まず松井は、地理学を歴史学の補助科学とする従来の見解を批判し、このような「歴史の地理的説明」は地理学ではなく「歴史観」「歴史哲学」であると見なした⁷⁵⁾。また松井は、地理学者ヘットナーによる科学の3分類「組織論的科学」「歴史的科学」「地方誌的科学」を踏まえ、地理学は3つ目の「地方誌的科学」に相当する学問であるとした⁷⁶⁾。その上で地理学の目的を、「統一的全体」としての「地域」の解明と考えた⁷⁷⁾。

歴史の地理的解釈を歴史家の仕事であるとする松井の考えは小牧に継承されている。すでに見たように、小牧もこの種の研究を「地理的史観なる一種の歴史哲学の研究に属する」⁷⁸⁾と述べているからである。また、地理学の目的を「統一的全体」としての地域とする考えについても小牧に継承されている。このように、松井の地理思想が小牧の歴史地理学理論の転換に直接的影響を与えたのは事実といえよう⁷⁹⁾。

(3) 実践的研究の内容について

それでは小牧の理論的転換は、実際の研究にどのような変化をもたらしたのであろうか。この点について参考となるのは、昭和12（1937）年に刊行された博士

論文『先史地理学研究』である⁸⁰⁾。この著は理論編の第1部「先史地理学の理論」と実践編の第2部「先史地理学的研究」に分かれるが、理論編となる第1部の大部分は、昭和8年の『歴史地理学』の内容が再構成されて収録されたものである⁸¹⁾。従って素直に考えれば、第2部の事例研究は第1部で展開された「時の断面」説を実践した研究であると理解できる⁸²⁾。

その上で第2部の研究を見ると、収録された事例研究は、興味深いことにいずれも昭和8年の理論的転換以前における初期の先史地理学研究であることに気付く。1章の「越後及羽後海岸平野の研究」は、大正15(1926)年の「日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察」⁸³⁾であり、2章の「河内平野の研究」は昭和2(1927)年発表の「河内平野の古地理」⁸⁴⁾、3章の「出雲平野の研究」は昭和2年から同3年にかけて発表した「宍道湖の鹹度問題」⁸⁵⁾である。すでに見たように、これらはいずれも「歴史地理学に関する私見」で見た1つ目の研究である自然環境の変遷史である。小牧の言う「自然的景観、文化的景観の統一的全体」について考察した研究ではないものの、いずれも「過去の地誌」学であり、先史時代ないし石器時代という「時の断面」における自然環境や景観の復原に関する研究である。いうならば小牧は、昭和8年における「時の断面」説への転換以前から、事実上、「時の断面」説に基づく研究を実践していたこととなる。そのような思いが小牧自身にあったからこそ、初期の先史地理学論考を『先史地理学研究』に収録したのだと思われる。

もちろん昭和8年以降についても、「時の断面」説を実践した研究事例は見られる。例えば昭和10(1935)年の「琵琶湖湖上交通の変遷」⁸⁶⁾や「西近江路交通の歴史地理学的考察」⁸⁷⁾がそれに該当する。いずれも近江国における交通地理の変遷史的研究であり、前者が琵琶湖の湖上交通、後者が琵琶湖西岸の陸上交通に関する歴史地理学的論考である。いずれの論考も飛鳥時代から明治時代までを対象とし、各時代の「時の断面」における交通地理を説明叙述している。また、共著ではあるが、昭和11年の「江勢交通路と近江商人」⁸⁸⁾は「中世末」という「時の断面」における近江国と伊勢国との間の交通路について考察した論考と位置付けることができる。このように小牧は、昭和8年の以前も以後も、一貫して「時の断面」説に基づく歴史地理学を実践していたこととなる。すなわち理論的転換が行われた昭和8年は、必ずしも実践的研究にとっての転換点とはなっていないのである。

さらに興味深いのは、小牧が否定した地人相関論の研究である。実は小牧は昭和8年以降も、岩波講座『歴史地理学』で否定したはずの地人相関論に基づく研究を継続的に行っているのである。例えば昭和9年の「本邦海岸砂丘固定作業史の断片」(第一報・第二報・第三報)⁸⁹⁾や昭和10年の「本邦潟湖埋積埋立干拓史の断片」(第一報・第二報)⁹⁰⁾は、いずれも「時の断面」に関わる論考というよりは、むしろ旧来の歴史地理学理論のうちの2つ目の方面である、人類の地理的環境への作用に関わる研究といえよう。例えば「本邦海岸砂丘固定作業史の断片」では、その研究の狙いを「本邦各地の海岸砂丘に於いて徳川初期以来明治三十二三年頃即ち一九〇〇年代の初頭頃に至る間に於いて砂丘の固定、飛砂の防止

に対して如何なる方法が採られて来たか、砂丘の固定作業に於いて如何なる歴史的事実が展開したか」の解明にあるとしており、砂丘という自然環境に対する人間の歴史的営為を明らかにしようとする研究であるといえる。また、昭和 11 年発表の「江北の断層地形と交通路」は、琵琶湖北部における交通路がことごとく断層線に支配されて設定されていることを論じたもので、旧来の 3 つ目の方法、すなわち地理的環境の人類歴史への影響に関する研究である⁹¹⁾。

このことは昭和 20 (1941) 年 5 月に発表した、京都帝国大学教授としての最後の歴史地理学研究である「平安京変遷の地理学的考察」⁹²⁾についても同様であった。この論考についても、旧来の 3 つの方面の歴史地理学のうち、まさしく 3 つ目の地理的環境の人類歴史への影響に関する研究であり、歴史の地理的解釈と位置付けることができる。この論考は非常に興味深い視点を含んでいることから、以下において若干この論文の内容に触れることとしたい。

この論考で小牧は、平安京の右京域が「夙に荒廢」した原因について、従来、単に右京の地が卑湿地であったとする「抽象的な説明」にとどまり、「その実証的説明に至つては未だ欠くところが尠くなかつた」と指摘した。そこでこの論考では、その地理的考察を試みることで「歴史家の参考」に供することを狙つたとしている。小牧によれば、右京衰微の地理的原因は次の 5 点が考えられるとした。まず 1 点目が「地形が低平」である点である。このため「一度河川の氾濫を見んか忽ち排水の不良を来たし、それが直ちに湿澤地形成の原因」になったとした。2 点目はその地質が「粘土又は泥土乃至は腐植質土」のためと考えた。これらの地質は「水を吸収又は濾過すること」が困難なため、湿地帯形成の素因になったとした。3 点目に右京域が「河川の氾濫地域であり又排水不良の地帯」であった点を挙げ、4 点目にもともと右京域には「著しく湿澤地が多かつた」こと、最後に「地下水位が高く水質が不良」であった点を指摘した。最後の点については、地下水が不良であったがゆえに右京への居住が進まなかったと考えたが、一方で現代においては豊富に工業用水が得られることから旧右京域に工場が進出して工業化が進んだとした。このように小牧は、平安京遷都以降の右京域の衰微(変遷)について、その現象と自然地理的条件の関連性について考察を試みている。小牧は論文の最後で「従来の地理的環境決定論への反動として動もすれば地理的事実の軽視に陥らんとする学界一般の風潮」に対し、平安京変遷に関する考察は「一の反省を要請」すると強調している。すなわち右京変遷の「根底に横たはる自然の地理的条件は決して之を看過し得ざるものなることを認めざるを得ない」という発想であった。

このように「平安京変遷の地理学的考察」では、「変遷」と題してはいるものの、実質的には地人相関論の一部である歴史の地理的解釈の研究である。もっとも単なる歴史の地理的解釈を大きく超えた、かなり深い自然地理学的な解釈が加えられており、小川門下の小牧の面目躍如たるものがある。京都帝国大学教授としては最後の歴史地理論考となったが、「時の断面」説を実践する内容ではなく、むしろ歴史の根底にある自然的条件の重要性を論ずるものであった。

もっとも小牧は昭和8年の『歴史地理学』において、この歴史の地理的解釈の意義を必ずしも否定していたわけではない。小牧はこのタイプの研究は歴史家にとって意義があると考えていたようで、「再現せられた或る時代に於ける土地地域の自然的条件、自然的景観なるものは又歴史家の歴史研究に大なる寄与をなすであらう。即ち歴史家にとっては人間歴史の舞台を明かにすることとなるからである」と述べ⁹³⁾、歴史の自然的基礎や歴史の地理的解釈の研究の余地を残している。小川門下として自然地理学に深い造詣を有する小牧としては、地人相関論的な研究は取り組みやすかったという個人的な理由もあると考えられる。

以上、理論的転換以降の小牧の事例研究の内容について検討してきたが、結論を言えば、小牧は確かに昭和8年に理論的転換を果たしているが、実践的研究の内容についてはそれほど変化していないということとなる。小牧は理論的転換以前から、事実上「時の断面」説に基づく先史地理学的研究を行っていた。理論的転換後においても、「時の断面」の研究を進めるのみならず、否定したはずの地人相関論に基づく研究を並行して進めていたのである。昭和8年の理論的転換は、厳密な意味においては実践的研究の完全な転換を意味するものではなかったといえよう。

さて、この節を終えるにあたり、若干順序は前後するが、昭和8年の岩波講座『歴史地理学』以降の小牧の足跡について若干触れておきたい。小牧は昭和11(1936)年12月に博士論文「先史地理学研究」を京都帝国大学に提出し、翌12年8月に文学博士の学位を授与された⁹⁴⁾。冒頭に述べたように、この学位授与は大学の地理学教室で学んだ研究者としては初めての学位取得であった。この博士論文が同年に刊行されたことは前述のとおりである⁹⁵⁾。学位授与の翌13年、小牧は石橋五郎の後を受けて教授に昇任した。その年より突如として「日本地政学」を提唱し始め、助教授の室賀信夫、講師の野間三郎ら当時の地理学教室関係者とともに地政学的な活動及び著述を展開するようになった⁹⁶⁾。これを境に小牧は「日本地政学」に没入し、いわゆる従来の歴史地理学研究にはほとんど従事しなくなった。先に取り上げた「平安京変遷の地理学的考察」を発表したのは、まさに「日本地政学」一色に染まっていた時期であった。

昭和20(1941)年8月に日本は敗戦を迎え、その年の12月、小牧は敗戦を承けて自主的に京都帝国大学教授を辞職することとなった。昭和22年11月には公職追放仮指定を受けたが、同26年8月には公職追放仮指定が解除され、翌27年からは滋賀大学学芸学部(現、教育学部)教授として地理学を講じ、同34年からは学長を2期務めた⁹⁷⁾。戦後、小牧は先史地理学や歴史地理学を本格的に研究することなく、教え子や研究仲間との民俗や村落に関する共同研究などに従事していた。亡くなったのは平成2(1990)年、享年91歳であった⁹⁸⁾。

V. おわりに

本章では、これまであまり本格的に論じられることのなかった小牧実繁の歴史地理学について、その理論および理論と実践的研究との関係を中心に考察を加え

てきた。足利が指摘したように、小牧は昭和8年の『歴史地理学』（岩波講座・地理学）で「時の断面」説を提唱し、それまでの地人相関論を中心とする歴史地理学から大きな理論的転換を果たした。その直接的な要因となったのは、小牧が教鞭をとっていた京都帝国大学史学科の受講生・松井武敏の地理学観であった。

しかし実践的研究を見る限り、小牧は昭和8年の前後で大きな変化をすることなく、一貫して「時の断面」説に基づく研究、および地人相関論に基づく研究を並行して進めていた。結論を言えば、理論的な転換はしたものの、実践的研究については転換していなかったこととなる。むしろ実践的研究の内容が質的に転換したのは、昭和13年の「日本地政学」提唱以降というのがふさわしいと思われる。

さて、小牧自身は戦後、先史地理学や歴史地理学の第一線からは退いたが、小牧が提唱した「時の断面」説は門弟である米倉二郎や藤岡謙二郎らが継承、発展させていくこととなった⁹⁹⁾。特に藤岡は多くの著作を通じてその理論を普及させていったことから、「時の断面」説はわが国の歴史地理学界に幅広く受容され、実践されることとなった。その意味でも小牧は、自身の著作やその門下を通じて日本の歴史地理学の方向性を決定づけたといっても過言ではないと思われる。

【注】

- 1) 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版、2008、113頁。
- 2) 小牧実繁『先史地理学研究』内外印刷出版、1937、129頁（第1部）、85頁（第2部）。
- 3) ①角田文衛「小牧実繁先生」（同編『考古学京都学派＜増補版＞』雄山閣出版、1997）、129頁。わが国で大学に地理学教室が設置されたのは、周知のように明治40（1907）年の京都帝国大学文科大学の史学地理学第二講座（地理学教室）を嚆矢とする。続いて設置されたのは、明治44年（1911）の東京帝国大学理科大学地質学科における地理学講座であった。『学位大系博士録』によれば、小牧の学位取得以前にこれらの大学の地理学教室出身者が学位を取得している事例は確認できない。②井関九郎編『昭和十五・六年版 学位大系博士録』発展社出版部、1940、（文学博士）1-13頁、（理学博士）1-23頁。
- 4) 足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」（京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房、1982）、206-216頁。
- 5) 歴史地理学史に関する先行研究をひもとくと、必ず小牧やその歴史地理学について言及していることが分かる。例えば村松繁樹「日本に於ける歴史地理研究史」日本史研究7、1948、805-806頁、福井好行「日本歴史地理学の展開」歴史地理学紀要I（本質と方法）、1959、5-6頁、浅香幸雄編『日本の歴史地理』大明堂、1966、3頁、水津一朗「小川琢治先生とその後の日本における歴史地理学」地理学評論44-8、1971、571-572頁など。しかし小牧とその歴史地理学を主題とした研究は足利のものを除くと皆無である。
- 6) 柴田陽一「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」歴史地理学47-2、2005、42-63頁。
- 7) 柴田陽一「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立—個人史的側面に注目して—」人文地理58-1、2006、1-19頁。なお、山野も「探検」と「地政学」

- をキーワードに大戦期の今西錦司と小牧実繁をとり上げている。山野正彦「探検と地政学—大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向—」人文研究 51-12, 1999, 1-32 頁。
- 8) 前掲 4) 215 頁。
- 9) 小牧の先史地理学とは、歴史地理学が「歴史以後現在に至るまで」を対象とするのに対し、「人類の出現より歴史の黎明に至るまで」を対象とする地理学の一分野である。小牧実繁「先史集落地理」地球 5-4, 1926, 304 頁。
- 10) 前掲 3) ①133 頁。
- 11) 小牧実繁「序文」(日本歴史地理学研究会『考古地理学 歴史地理学紀要 5』古今書院, 1963, 2 頁。
- 12) 戦後において歴史地理学的研究が全く見られないわけではなく、昭和 31(1956)年の「野の開発—蒲生野の場合—」では古代から昭和にわたる蒲生野の開発や耕地化について論じている。小牧実繁「野の開発—蒲生野の場合—」(田中秀作教授古希祝賀会編『田中秀作教授古希記念 地理学論文集』柳原書店, 1956), 176-191 頁。しかし小牧の歴史地理学研究の最盛期が昭和 20 年の敗戦までであるという事実には変わりはないため、本章では敗戦までの時期を検討対象とする。
- 13) 小牧の伝記的事実については主として以下の文献を参考とした。①(無署名)「小牧実繁先生年譜」(小牧実繁先生古希記念事業委員会『小牧実繁先生古希記念論文集 人文地理学の諸問題』大明堂, 1968), 511-517 頁, ②小牧実繁「わがおもひでの記」古代文化 37,1985, 261-268 頁, ③前掲 3) ①123-146 頁。
- 14) 喜田貞吉の自叙伝『六十年之回顧』によれば、喜田が滋賀県の坂本を訪れたのは大正 5 (1916) 年 2 月であった。喜田貞吉「六十年の回顧」(『喜田貞吉著作集 14 六十年の回顧・日誌』平凡社, 1982), 208 頁。これは小牧が中学を卒業する約 1 か月前のことである。
- 15) 大正 5 (1916) 年 9 月末の『第三高等学校一覽』の「第一部一年乙類」には「膳所 小牧実繁 滋賀」とある。第三高等学校『第三高等学校一覽 大正五年九月起 大正六年八月止』, 1916, 123 頁。なお、「第一部乙類」とは、「文科大学志望ノ者」が入学する部類のことである。『第三高等学校一覽 大正五年九月起 大正六年八月止』の 60 頁参照。
- 16) 前掲 13) ②263 頁。
- 17) 黒板勝美『国史の研究 総説の部』には「第二章 補助学科及びその参考書」に「歴史地理学」の項目がある。黒板勝美『国史の研究 総説の部』文会堂書店, 1918 (1913 年刊行の訂正第 9 版), 59-78 頁。
- 18) 京都帝国大学『京都帝国大学一覽 自大正八年 至大正九年』, 1920, 315 頁の「史学科」「大正八年入学」の欄には「小牧実繁 滋賀」とある。
- 19) 竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』古今書院, 1986, 43-44 頁。
- 20) 例えば大正 11 (1922) 年 7・8 月には山口県長門峡の調査に、12 月には地震直後の長崎県島原に震災調査に小川とともに従事している。前掲 13) ①512 頁。
- 21) 前掲 13) ②265 頁。
- 22) 前掲 4) 209 頁。小牧は、砂丘から石器が出土したとの報告が『人類学雑誌』に載っていることを知り、「うれしいことでした」となつかしむように足利にコメントしたという。
- 23) (無署名)「京都帝国大学文学部卒業論文」史林 7-2, 1922, 330 頁。なお、前掲 13) ①の「小牧実繁先生年譜」には卒業論文題目が「海岸の研究—河北潟を中心として—」とあるが、ここでは同時代の記録である『史林』の記事がより正確であると考え、それに依拠した。
- 24) 斎藤 忠『日本考古学人物事典』学生社, 2006, 195-196 頁。

-
- 25) 小牧実繁『日本地政学宣言』弘文堂書房，1940，186頁。
- 26) 前掲3) ①125頁。
- 27) (無署名)「京都帝国大学文学部史学科本学年講義題目」史林11-3，1926，494頁。なお，前掲13) ①の「小牧実繁先生年譜」には講義題目が「先史集落地理」とあるが，ここでは同時代の記録である『史林』の記事がより正確性が高いと判断し，それに依拠した。
- 28) 吉川幸次郎他「先学を語る 小川琢治博士」東方学54，1977，171頁。
- 29) 小牧実繁「歴史地理学に関する私見」歴史と地理16-5，1925，418-427頁。
- 30) 小川は帝国大学理科大学を卒業後，農商務省の地質調査所に10年以上技師として勤務した経歴の持ち主で，地質学や自然地理学に造詣が深かった。岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究』古今書院，2000，79頁，85頁。
- 31) 前掲4) 212頁。
- 32) 小牧実繁「先史集落地理」地球5-4，1926，302頁。
- 33) 小牧実繁「先史地理学に就いて」地理教育12-2，1930，113頁。
- 34) 石橋は東京帝国大学史学科を卒業した人文地理学者で，ラッツェルの地理学に依拠する地人相関論を理論的支柱としていた。岡田俊裕『地理学史—人物と論争』古今書院，2002，24-26頁。
- 35) 前掲29) 425頁。
- 36) 小牧実繁「先史集落地理」地球5-4，1926，298-318頁。
- 37) 小牧実繁「先史地理学に就いて」地理教育12-2，1930，105-115頁。
- 38) 小牧実繁「最近に於ける北陸海岸線の移動」地球3-1，1925，159-168頁。
- 39) 小牧実繁「日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察」史林11-1，1926，81-97頁，史林11-2，1926，234-242頁。
- 40) 小牧実繁「河内平野の古地理」史林12-1，1927，46-56頁。
- 41) 小牧実繁「宍道湖の鹹度問題」地球8-4，1927，257-270頁，地球8-5，1927，361-368頁，地球8-6，1927，418-426頁，地球9-1，1928，46-52頁，地球9-2，1928，123-127頁。
- 42) 小牧実繁「砂丘移動の人文上に及ぼす影響」歴史と地理10-1，1922，29-35頁，歴史と地理10-2，1922，117-123頁。
- 43) 小牧実繁「出雲の沖積地海岸」地球3-1，1925，227-234頁。
- 44) 小牧実繁「古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて」地理教育3-1，1925，11-20頁。
- 45) 小牧実繁「古代四国の集落に就いて」地球4-3，1925，208-216頁。
- 46) 前掲40)。
- 47) 前掲44)。
- 48) 小牧の歴史地理学論考には『歴史地理』からの引用が少なくない。例えば「古代太平洋沿岸の植民と日本海流とに就いて」では、『歴史地理』からの引用が2か所，日本歴史地理学会が編集発行した『奥羽沿革史論』からの引用が1か所ある。
- 49) 小牧実繁『歴史地理学』(岩波講座・地理学)岩波書店，1933，1-120頁。
- 50) 前掲4) 211頁。小牧実繁「ラ・キナに旧石器を掘るの記」歴史と地理26-1，昭和5，76-81頁。
- 51) 前掲13) ①513-514頁。
- 52) 前掲49) 3頁。
- 53) 前掲49) 29頁。
- 54) 前掲49) 54頁。
- 55) 前掲4) 215頁。

-
- 56) 前掲 49) 57 頁。
- 57) 前掲 49) 55 頁
- 58) 前掲 49) 47 頁。
- 59) 前掲 49) 51 頁。周知のように、この用語はフランス学派の祖ポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュによる「*unité terrestre*」(地的統一)の訳語である。ブラーシュ著・飯塚浩二訳『人文地理学原理 上巻』(岩波文庫)岩波書店、1970、44 頁。
- 60) 前掲 49) 53 頁。
- 61) 小牧はドイツの地理学者ヘットナーの科学分類(「系統的科学」「年代的科学」「地方誌的科学」)を踏まえ、地理学を「地方誌的科学」として「年代的科学」に含まれる歴史学と理論的に峻別した。前掲 49) 33 頁。
- 62) 前掲 49) 58 頁。
- 63) 前掲 4) 214 頁。
- 64) 前掲 49) 60 頁。
- 65) 前掲 49) 59 頁。
- 66) 小牧は歴史地理学を、「地理学の、時間の範疇に関する一部面」と位置付けている。前掲 49) 58 頁。
- 67) 前掲 49) 62 頁。
- 68) 前掲 49) 62 頁。
- 69) 前掲 49) 63 頁。小牧は狭義の歴史地理学を「歴史地理学の地理的方法」、広義の歴史地理学を「歴史地理学の歴史的方法」との呼称している。なお、小牧は狭義の歴史地理学(歴史地理学の地理的方法)を、歴史地理学の「純正の方法」と考えていた。なぜならば「変化発展の跡を追跡すること」は歴史学の使命であり、「本来地理学の使命ではないからである」。前掲 49) 63 頁。
- 70) 前掲 49) 62 頁。
- 71) 「松井学士の業績」とは、小牧の昭和 6 (1931) 年度地理学特殊講義試問に対する自由論文「低伊都誌」、同 7 年 6 月の京都帝国大学文学部地理学地理学談話会における口頭発表「地理学性質論」、同 8 年 1 月提出の卒業論文の序論の 3 点である。このうち、今日目にすることができるのは卒業論文の序論である「経済地理序説」のみである。
- 72) (無署名)「松井武敏教授略歴・著作主要論文」名古屋大学文学部研究論集 62 (史学 21), 1974, 1 頁。松井は昭和 5 (1930) 年に京都帝国大学文学部地理学教室に入学し、ここで小牧の教えを受けた。昭和 8 年に卒業し、同志社大学予科、甲南高等学校(現、甲南大学)を経て昭和 17 年に和歌山高等商業学校(現、和歌山大学)に勤務した。戦後の昭和 24 (1949) 年には名古屋大学文学部教授を兼務した(のち専任)。平成 4 (1992) 年に没している。専門は経済地理学である。
- 73) (無署名)「京都帝国大学文学部史学科昭和七年度卒業論文題目」史林 18-2, 1933, 388 頁。
- 74) 松井武敏「経済地理序説—実際研究の序として—」地理論叢 2, 1933, 100-137 頁。
- 75) 前掲 49) 111 頁。
- 76) 前掲 49) 108 頁。
- 77) 前掲 49) 116 頁。
- 78) 前掲 49) 55 頁。
- 79) 京都帝国大学地理学教室で小牧に学んだ織田武雄は後年、「小牧先生もそのころ(昭和 8 年頃—筆者注)『歴史地理学』を執筆しておられまして、米倉(二

-
- 郎一筆者注)さんや松井君と歴史地理学の方法論について、よく話しておられました」と回顧している。前掲 19) 57 頁。
- 80) 前掲 2)。
- 81) 第 1 部の「先史地理学の理論」は「地理学」に関する理論、「歴史地理学」に関する理論、「先史地理学」に関する理論から構成されるが、このうち「地理学」と「歴史地理学」に関する理論の部分は岩波講座の『歴史地理学』が再構成されて収録されたものである。第 1 部の全 129 頁中、その箇所は 104 頁に上っている。
- 82) 小牧は歴史地理学と同様、先史地理学の「使命・職能」についても「先史時代に於ける或る時の断面に於ける土地・地域（景観）を復原し再現する」ことであるとしている。前掲 2) 106 頁（第 1 部）。
- 83) 前掲 39)。
- 84) 前掲 40)。
- 85) 前掲 41)。
- 86) 小牧実繁「琵琶湖湖上交通の変遷」地理教育 22-3, 1935, 241-246 頁, 地理教育 22-4, 1935, 405-410 頁, 地理教育 22-5, 755-761 頁。
- 87) 小牧実繁「西近江路交通の歴史地理学的考察」地理教育 22-5, 1935, 569-589 頁。
- 88) 小牧実繁・村松 寛「江勢交通路と近江商人」地理と経済 1, 1936, 45-59 頁。
- 89) 小牧実繁「本邦海岸砂丘固定作業史の断片」地理論叢 3, 1934, 113-208 頁（第一報）, 地理論叢 4, 昭和 9, 127-152 頁（第二報）, 地理論叢 5, 1934, 1-9 頁（第三報）。
- 90) 小牧実繁「本邦潟湖埋積埋立干拓史の断片」地理論叢 6, 1935, 67-95 頁（第一報）, 地理論叢 7, 1935, 121-132 頁（第二報）。
- 91) 小牧実繁・村松 寛「江北の断層地形と交通路」立命館文学 3-5, 1936, 508-519 頁。
- 92) 小牧実繁「平安京変遷の地理学的考察」史林 30-1, 1945, 1-10 頁。
- 93) 前掲 49) 64 頁。
- 94) 「小牧実繁先生年譜」および『考古学京都学派』によれば、主査は浜田耕作、副査は東洋史の羽田 亨, 日本史の西田直二郎であった。前掲 3) ①128-129 頁, 前掲 13) ①514 頁。なお, 昭和 12 年 9 月 14 日の『官報 第 3211 号』によれば, 小牧の学位授与は昭和 12 年 8 月 5 日付となっている。『官報 第 3211 号 昭和 12 年 9 月 14 日』, 366 頁。
- 95) 前掲 2)。
- 96) 前掲 1) 79-80 頁。
- 97) 前掲 13) ①515-517 頁。
- 98) 米倉二郎「小牧実繁先生の人と学問」歴史地理学 149, 1990, 1 頁。
- 99) 前掲 1) 113-115 頁。